

〈論文〉

Hardy 夫妻の愛と悲しみの歴史

— “Poems of 1912-13” 誕生の背景 —

橘 智子

Abstract

The purposes of this paper are twofold: (1) to trace the unhappy relationship between Thomas Hardy and his wife, Emma, and (2) to make clear the reasons why Hardy composed 21 poems immediately after the death of Emma, whom he had treated coldly while she was alive.

In spite of their love marriage of four years' courtship, Hardy and Emma fell out with each other in less than a year, and their love began to fade by degrees. Their life was dyed with gloomy color. However, Hardy made no effort to improve the matter and restore their former love and harmony. The only thing he did was to escape into his own world as a writer. He continued to ignore his wife's sad, painful feelings.

Emma died suddenly in solitude in 1912. After her death, Hardy read “Some Recollections” written by her. This is a private history that describes their loving courtship in detail. Emma's writing affected Hardy: he recalled their old, happy love and he also regretted his negligence as husband, though too late.

Hardy composed 116 poems referring to Emma after her death. Especially he selected 21 poems from the group which he composed from December 1912 to March 1913, named “Poems of 1912-13” and released them in “Satires of Circumstance” in 1914. “Poems of 1912-13” is, therefore, Thomas and Emma Hardy's autography of love and sorrow, and at the same time, Hardy's confession of his guilt.

I はじめに

Thomas Hardy (1840-1928) は、1871年から1895年の24年間に多くの作品(14冊の長編小説、51編の短編小説、叙事詩と詩劇を各1作)を創作し、19世紀末の英国文壇における偉大な小説家として高い評価とゆるぎない地位を確立した。しかし1895年に *Jude the Obscure* を出版するや、当時の Victoria 朝社会の福音主義をふまえた倫理規範に反する内容だと誹謗中傷され、創作意欲を殺がれた Hardy は *Well-Beloved* (1897) を最後に小説と決別し、宿願の詩人に転向した。Hardy はここで “the ashes of the novelist” (Millgate, 384) の中から、己の衿持と年齢を重ねた個性特異な詩人として不死鳥の如く蘇ったと言えよう。時に Hardy、58歳であった。以来彼は、88歳で死去するまでの30年間で凡そ1000篇の詩を書き、これらを全8巻の詩集に収めて世に問うた。

これらの詩のテーマは、哲学・自然・戦争・愛・女性・幻想など多岐に渡る。Hardy は、この世に起こりうる人事百般を拾い上げ、余すところなく人生を詠み上げている。特に「愛の詩人」とも称される Hardy の作品には愛の抒情詩も多い。しかし彼が描く男女の愛は、甘美で情熱的なものだけではない。Hardy は愛を、利己的で永続性がなく常に背信の要素を含んでおり脆く儂いものだと思えていた。愛し傷つき、一時的な愉悦と悲哀を繰り返しながらも尚愛を求めてやまない人間の悲しい定めを彼は直視し、それを客観的、写實的に詠んだのである。

しかしながら妻の Emma が急死した直後、彼女の遺稿 “Some Recollections” を読んで、43年前に知り合った頃の情熱的で瑞々しい愛を回想したことにより、Hardy は一挙に過去を現在に手繰り寄せ、彼女に関する116篇の抒情詩を書いた。ここに至って Hardy の詩作の姿勢が崩れる事になる。つまり詩人 Hardy ではなく、個人 Hardy としてきわめて主観的に自らの感情を赤裸々に詠んだのである。特に Emma の死後1912年12月から

1913年3月までの4ヶ月で書き上げた21篇の詩群は、“Poems of 1912-13”と銘打たれ、第四詩集“Satires of Circumstances”に収められ出版された。結婚生活38年の歳月を凝縮し、移ろい歪み行く夫婦愛の姿をリアルに描いているこれらの作品の中に、Hardy 夫妻の愛と悲しみの歴史が、否、世の全ての夫婦が織り成す愛の葛藤の歴史が読み取れるのである。

“Poems of 1912-13” (*veteris vestigin flammae*)¹ は抒情詩として高く評価されている。C. J. Weberによると、殆どの英文学者は“the best three series of love poems”を選ぶよう請われた場合、Shakespeareの“Sonnets”そしてE. B. Browningの“Sonnets from the Portuguese”に続いて“Poems of 1912-13”の名を挙げるそうだが、Weber自身は“Poems of 1912-13”こそベストだと考え、その理由を次のように述べている。

Hardy's poems ... run the gamut from first site of loved one, through courtship, to marriage, to quarrel, to staled familiarity, to disillusion, to bitterness and 'division' and finally to death, and the rebirth of love. In short, Hardy's poems provide a complete summary of his adult life in a way that neither Shakespeare's nor Mrs. Browning's attempt.

(Weber, vii)

つまり、Hardyの“Poems of 1912-13”に示される人間の情感の範囲は、他の詩人たちのものとは比較にならぬというのである。

本論では、HardyとEmmaの出会いと4年に亘る幸せな求婚期間、結婚後の冷え切った夫婦関係、Emmaの死、そして“Poems of 1912-13”誕生に至るまでの経緯を追い、事実に基づいて書かれた彼ら二人に関する詩を読み解きながら、Hardy夫妻の愛と悲しみの歴史を辿った。そして同時にHardyがEmmaの死の直後から、憑りつかれたように彼女に対して償いの詩を書かざるを得なかった心理的背景を探ってみた。

II Emma との運命的な出会い：求婚時代の愛の詩

Emma との出会いから求婚に至る幸せな日々と言及している三篇の詩、① “When I Set Out for Lyonesse” ② “Ditty” そして③ “A Week”² を通して若き日の Hardy の恋心を辿ってみよう。

① “When I Set Out for Lyonesse”³

これは Hardy が1870年に書いた初恋の詩である。彼の詩としては珍しく歓喜に溢れている。1870年3月7日、St. Juliot 教会の修復調査の為に Cornwall⁴を訪れた Hardy は、丁度そこに寄寓していた牧師夫人の妹、Emma L. Gifford と知り合う。僅か3日の滞在であったがその間に二人は恋に落ちた。その時の心境がこの詩では詠まれている。第一スタンザでは Dorchester から100マイル離れた Lyonesse へ向けて一日がかりの旅がスタートする。この時点で Hardy は何の期待も抱いていない。第二スタンザでも、目的地に滞在している間、何が自分に降りかかることかと不安に駆られているだけである。ところが最後の第三スタンザでは目に “magic” を宿して帰って来る彼の姿が描かれる。その顔には「稀な測り知れない輝き」 (“radiance rare and fathomless”) がある。それは即ち Lyonesse に滞在中、心躍る出会いがあったからなのだ。この当時の Hardy は、建築事務所の助手をしながら小説家を志し、世に出るチャンスを待っている状態で極めて将来が不安定であった⁵。しかし、St. Juliot 教会における Emma との出会いと愛は、小説家として生きることを彼に決心させ、人生の重大な転機をもたらした。その歓喜を “magic” や “radiance” という言葉に込め、この詩を作ったのであろう。Hardy にとっては珍しく純愛を率直に歌った抒情詩である。

② “Ditty”

これも1870年の作である。5つのスタンザからなる小詩であるが、各スタンザの最後に“Where she dwells”という言葉が入っている。彼女の住む場所を友人知人には秘密にしていると詩人は述べる（第二スタンザ）。最後の第五スタンザで詩人はこのように言う。“Chance”（偶然）によって見つけた Emma の居る場所、それが自分には「この世のどこよりも素晴らしい場所」（“the spot/That no spot on earth excels”）と思えるのだ、と。Emma への純粋な恋心がひしひしと感じられる。

③ “A Week”

これも1870年の作。St. Juliot 教会の修復作業を終えて帰宅した後に、Emma を思って詠んだ詩で、7日の間に微妙に変化してゆく自分の心の様子を綴っている。詩のトーンは軽快で、恋する者の心の揺れがユーモラスに描かれている。月曜日から始まって日曜日で終わっているところにも、恋心の変化（moon の青白さから sun の赤い色が象徴する高揚感へ）を演出しようとする Hardy の工夫が見られる。仕事が完了し、今後は Emma と会うこともないだろう、くらいの思いしか抱かなかった月曜の夜。しかし火曜の夜には Emma が “Something beyond mere commonplace” を持つ女性として意識され始める。とは言え水曜日にはまだ二人が一緒になるなど夢にも思いはしなかった。ところが木曜日の正午になると、彼女が大好きで一緒に暮らしたいと考え始め、金曜日には彼女のことを “my dear one” と明確に認識し、心をときめかせる。土曜日 Emma は最高の女性として理想化され、日曜の夜になると Hardy は羽を切られたカモメが海恋しと鳴くように彼女に恋焦がれ、彼女のいない人生など “waste to me!” だと叫ぶのである。

以上三篇の詩から解るように、Emma と知り合った頃の Hardy は、純粋で情熱的な愛を彼女に対して抱いていた。ただ、その愛はまた、いかにも若

者のそれらしく、現実離れしており相手の女性を理想化しすぎていると言えなくもない。自分の好みに合うよう勝手に女性を美化し、その女性を独占したいと望む男の身勝手さが気になる。純粹な若々しい愛情表現ではあるが、こういう愛情は現実世界の中で早晩、破綻するきらいがあるように思われる。

Hardy と Emma は29歳で出会い、3日で恋に落ち、4年の求婚期間を経て互いの愛を確かめ合って結婚した。Emma は“Some Recollections”の中で、結婚当日を振り返り、“The day we were married was a perfect September day ... the 17th 1874 ... not brilliant sunshine, but wearing a sort of luminousness: just as it should be!” (Emma Hardy, 60) と書いている。太陽が燦燦と照っていたわけではないが、空には輝きがあり、それが自分たちの前途を祝福するサインだと思われたらしい。幸せ一杯の胸の内を彼女は述べているのである。おそらく二人は求婚期間、つまり熱愛の4年の間は、愛は全能でありどんな障害も困難も克服できると考え、将来の幸せな結婚生活を信じていたのであろう。

ところが結婚後1年足らずで二人の間には齟齬が生じ、夫婦仲はこじれて行った。この不測の事態にはいくつかの要因が考えられる。一つは階級の問題である。上流階級に属する Emma は無意識のうちに優越感を持ち、労働者階級出身の Hardy は劣等感や遠慮から彼女と率直に話し合い理解し合うことができなかった。二つ目は信仰の問題。Emma は熱心なキリスト教信者で、神を絶対的存在と捉えていたのであろう“... outward circumstances are of less importance if Christ is our highest ideal.” (Emma Hardy, 60-61) と述べていることから推察して、彼女にとってキリストは最高の理想であったことが解る。Hardy は C. Darwin, F. Spencer, J. S. Mill などの思想に傾倒し、キリスト教には懐疑的になり神の存在を信じかねていた⁶。三つ目にあげられるのが性格の不一致である。積極的で外向的な Emma に対し Hardy は生来神経質で内向的であった。夫婦それぞれの生い立ちや思考、哲学、性格の違いが、結婚生活の中で超克され互いを補完

するのではなく、対立して更に溝を深めてしまう結果にしかならなかったのである。

Ⅲ 冷めた愛と不和

結婚生活を開始したものの急速に Emma と Hardy の仲は冷めて行った。その溝の深さを示す三篇の詩、① “We sat at the Window” ② “Had You Wept” そして③ “Lost Love” を取り上げてみよう。

① “We Sat at the Window”

これは1875年作の小詩で、2つのスタンザから成る。そこには結婚して僅か1年目の Hardy 夫妻が早くも無聊に悩まされている姿が描かれる。第一スタンザで詩人は、互いに語ることも為すこともなく、“Swithin’s Day” に窓辺で降る雨を眺めているだけの自分たちの姿に言及する。3行目と8行目に “Swithin’s Day” が繰り返されることに注目したい。聖スウィジン (? -862) の祝日である7月15日に雨が降ると40日間降り続くという謂れがあり、Hardy は自分たち夫婦の不仲が容易に修復できぬ根深い性質のものであることをこの長雨によって暗示しようとしたのだろう。果たして二人はこの後、38年間に亘って冷めた夫婦関係を続けて行くことになる。第二スタンザで詩人は “How much there was to read and guess/By her in me, and to see and crown/By me in her.” と述べる。互いが相手の内面を理解しようとする努力を怠り、愛を回復させる手立ても講じてこなかったということである。続く “Wasted were two souls in their prime,/And great was the waste,” という表現には、不和の中で二人の大切な魂が磨滅してしまったことは取り返しのつかぬ損失だったと思う Hardy の無念さが読み取れる。しかし今更のように後悔しても、その頃は Emma と胸襟を開いて語り合うことが Hardy にはできなかつたのである。

② “Had You Wept”

この詩を読むと Emma の性格が Hardy の望むようなものでなかったこと、そして彼女に自分の理想ばかりを押し付けようとする Hardy の身勝手さがよく解る。具体的な状況説明は省かれているが、夫婦間に何か諍いがあり、夫である詩人はその時妻を「絶対に許してやらない」(“I bade me not absolve you”) と思った。激怒する夫に対して妻は泣いて抗議し、訴えるということをしなかった。Hardy は Emma に “I never see you shed a tear.” と語りかける。Hardy は涙を女性の「最強の武器」(“The weapon of all weapons best for winning”) と見ているのだが、Emma はそれを使わなかった。勝気で意地っ張りな女性だったのであろう。しかし Hardy には、そういう妻の性格を面白いと解釈する余裕はなく、ただひたすら彼女の頑固さが憎らしかったのかもしれない。目に涙を浮かべて淑やかに寄り添うような妻なら夫婦間の悶着もことなく収められたのに、と彼は一方的に Emma を詰るのである。J. O. Bailey は “The poem indicates a feature of Hardy’s personality, when persisted, he was quietly stubborn but when he was conscious of giving pain to others, he was quick to yield” (Bailey, 318) と述べている。反抗されると頑固になるが、自分が相手に苦痛を与えていると解るとすぐに妥協するのが Hardy の性格だったようだ。つまり彼は弱者には優しくしたのである。Emma が「泣く」という姿で明確に弱さを示したなら Hardy は彼女に優しくなれたのかもしれない。しかし Emma は、夫の前で弱い者として振る舞うことをしなかった。Hardy にはそういう妻の性格が理解できないが故に彼女なりの苦悩を思いやることもできなかったのであろう。女には泣いて男に訴えかける素直さや可愛げが必要だと言わんばかりの Hardy と、意地でも弱いところを見せまいとする誇り高い Emma がうまく行かないのは当然の成行きと言えよう。

③ “Lost Love”

これは男に冷たくされて苦悩する女の独白の詩である。Emma が語る体裁にはなっていないが、Hardy が彼女の心情を推察し、その心の内をこの詩の中で一人の女に語らせているのは明らかだ。愛する男の関心を取り戻したい一心で楽器を奏でたり（第一スタンザ）、歌を歌ったり（第二スタンザ）する女。しかし男は「断固とした歩み」（“determined walk”）で通り過ぎ、階段を上り（第一スタンザ）、ドアの中に姿を消す（第二スタンザ）。虚しく待ち続けるしかない女の「どうして私みたいな女が生まれてきたのか」

（“... why such/A woman as I was born!” 第三スタンザ）という嘆きの言葉でこの短い詩は終わっている。Emma は才色兼備で、中産階級の女性に相応しい教育を受けており、ピアノ、歌、絵画、文筆、乗馬など嗜みも十分にあった。その教養の豊かさが Hardy の心を捕らえたのである。かつては Emma のピアノや歌に魅了され彼女を「理想の女」と崇めた Hardy。しかし今は、美しい楽曲や声が聞こえても足も止めずに通り過ぎてゆく。彼女の意図は十分わかっているながら敢えて無視して近づかないのだ。男の断固たる足取りについて第二スタンザで “As if it would stay” という表現がされる。「止まってくれるのか」と女は一瞬期待するのだが、しかし男は通り過ぎて行ってしまふ。一瞬近寄ろうとして即座にそれを抑えてしまふ気持ちだが、この躊躇するかに思える足取りに暗示されているとも解釈できよう。Hardy 自身もそういう葛藤を感じていたに違いない。第二スタンザの最後、“And shuts a distant door.” という表現には詩人のもどかしさも感じ取れる。「懐かしい曲だね」という優しい一言のかわりに彼の胸に響くのは己の心の扉を閉ざす音なのだ。責められるべきは男女双方であろう。互いに一歩でも歩み寄り、言葉を交わしあい理解しあおうとする努力を重ねていたら、こうはならなかったかもしれない。

男女の愛、夫婦の愛は脆いものである。些細な感情の連れが誤解を生み、疎外感や嫌悪感、相互無視へと発展し、果ては離別に至る傾向にある。

Hardy と Emma の場合は、結婚 1 年目にして愛情が冷め始めたのであるが、離婚はせず夫婦の仮面を被り続けた。1895 年に Hardy の小説 *Jude the Obscure* が出版されるや、Emma は社会の倫理規範に反する内容であると激怒し、これ以後 17 年に亘って Hardy 夫妻は一階と二階に別れて家庭内別居を続けることとなる。その果てに 1912 年 11 月 27 日、Emma は二階の自分の部屋で誰にも看取られず孤独のうちに亡くなったのである。

IV “Poems of 1912-13” — 幻想的な愛の世界

Emma を失って初めて彼女の存在の大きさを知り、衝撃を受け戸惑う中で Hardy は重要なことに気づいた。それは彼女が過去に通じる扉を開いてくれたということであった。Emma の死後、Hardy は初めて彼女の遺稿 “Some Recollections” に目を通したのだが、そこには二人の愛に関する多くのことがリアルに詳細に綴られていて時の垣根を取り払ってくれた。Hardy は一挙に 43 年の歳月を遡って若き日へと戻り、Emma の美しい幻影を見て創作意欲を刺激され、彼女を追悼する 21 篇の詩群を書いた。若き日の二人の愛の姿が、幻想を伴いながらもその時々具象に支えられて描き出され、夢想的で極めて主情的な愛の詩群となっている。これが “Poems of 1912-13” の誕生である。どの詩にも Emma との間に生じた愛を大切に育む努力を惜しんだ自分自身を責め、後悔する Hardy の悲痛な叫びがこめられて我々の心を打つのである。ここでは “Poems of 1912-13” の中から数篇の詩を取り上げ、それらを通して二人の幻想的な愛の世界を覗いてみることにする。

① “The Going”

21 篇の詩群の冒頭に置かれた作品である。“Why” の繰り返しが多く、Emma の幻影に、なぜ黙って急に逝ってしまったのかと問いかける形を取っているが、それらはまた Hardy の自分自身を責める問いかけ…何故彼女の

死の気配を察知できなかったか、何故彼女に別れの言葉をかけられなかったのか…でもある。第5スタンザには“Why, then latterly did we not speak”とあり、愛が冷めるにつれ会話が無くなったのも自分の配慮の足りなさゆえだという反省がこめられる。しかし第6スタンザで現実に戻った Hardy は、今さら何を言っても遅すぎるのだ、“All's past amend,/ Unchangeable. It must go.”なのだと言いき放す。皮肉にも Emma の死によって回復した43年前の愛、それがもたらした悔悟と心痛、自らの死の予感、孤独感などが述べられ、様々な切ない思いが相俟って哀愁を誘う詩である。

② “The Voice”

自分に呼びかける Emma の亡霊の声を聞いた Hardy が、それを反芻し応答する、という設定になっている。この声は、第一スタンザで“Saying that now you are not as you were/When you had changed from one who was all to me,/But as at first, when our day was fair.”と描写される。「がらりと変わってしまった私ではなく昔の若い頃の愛らしい私なのです」と盛んに呼びかける亡霊の声。ここに Hardy 夫妻の過去の明暗が示唆される。もしこれが Emma の声なら青い上着を着た昔の若くて美しい姿を見せてほしいと切望しながらも幻想から覚めた詩人は、自分が風の音を聞いているだけだったと知る（第三スタンザ）。最後の第四スタンザで Hardy は自らの老いの姿を北風に舞い散る枯葉に重ね、最終行で再び“*And the woman calling*”と述べる。風の音が女の叫び声に聞こえてしまうという所に Hardy の Emma に対する自責の念や後悔が読み取れる。亡き妻への愛惜だけでなく、彼女に対する自責の念や後悔の気持ちが述べられ、そこに老いや死への不安も漂っているのは、Hardy の書くエレジーの特色である。

③ “After Journey”

Hardy の抒情詩の中でも格調高い優れた一篇と評価されている詩である⁷。Emma との愛を育んだ思い出の地の一つ、Pentargan Bay を訪れ、彼女の幻影を追い求める詩人は、43年前の彼女の若々しい面差し “With your nut-coloured hair, / And gray eyes, and rose-flush coming and going” (第一スタンザ) を回想する。第二スタンザでは、彼らの不幸な過去について “Summer gave us sweets, but autumn wrought division? / Things were not lastly as firstly well / With us twain, you tell?” と問いかける。愛のない日々について妻の愚痴を聞き出そうとするかのようだ。第三スタンザで詩人は Emma の亡霊が自分を懐かしい場所へと導いてくれていることに感謝し、二人で過ごした晴れた夏の日の甘く楽しい一時を回想して “You were all aglow” と Emma を讃える。第四スタンザで詩人は Emma の霊に「もう一度ここへ呼び出しておくれ」 (“bring me here again”) と言う。しかし “though Life lours” という表現から自分の老いや死を意識していることもわかる。もう二度とここを訪れることはないと思感されるだけに Hardy の複雑な気持ちが粛々と伝わってくる。

④ “Beeny Cliff”

Beeny Cliff は風光明媚な景勝地であり、Emma に初めて会った時案内された場所で求婚時代も Emma と Hardy は数回ここを訪れたらしい。

(Bailey, 302) 43年を経て同じ風景を展望した詩人は、相思相愛だった頃の若く美しい Emma の面影 “The woman riding high above with bright hair flapping free- / The woman whom I loved so, and who loyally loved me.” (第一スタンザ) をそこに求める。第二スタンザでは昔の “clear-sunned March day” さながらの美しい風景の中で Hardy と Emma は完全に融合し合う。第三スタンザでは雲が陽を遮り雨が降り出し、二人が不仲になった過去が示唆されるが、やがて再び太陽が顔を出し、海が

紫色に染まる。(“And then the sun burst again, and purples prinked the main.”) Tom Paulin によれば“purple”は Hardy にとって“spiritual brilliance”を意味するのだと言う。(Paulin, 73) 第四スタンザで詩人は、この「靈的な光輝」に包まれた風景の中を Emma と二人、昔と同じように逍遥する錯覚に陥るのだが、最後の第五スタンザでは、その幻想は消えて詩人は、「彼女は此処ではなくどこか他所にいる」(“The woman now is — elsewhere —”)という現実に覚醒する。“elsewhere”の前後につけられたダッシュが、幽冥境を異にしてしまった彼ら二人の隔たりを暗示しているかのようだ。しかし何故か Hardy は「Emma は私の心の中にいる」とは決して言わないのである。

⑤ “At Castle Boterel”

Castle Boterel の町は、狭く急な坂が続く険しい丘の上にある。43年前、Emma と二人で登ったその道を、今 Hardy は独りでたどる。振り向くと、雨にぬれる坂道に自分たち二人の幻影がハッキリと見える。第三スタンザで詩人は“*What we did as we climbed, and what we talked of/ Matters not much, nor to what it led, ...*”と述べる。何をし、何を話し、その結果どうなったかは大した事ではないのだ。あの時二人は永遠の愛を確認した。詩人は、その一瞬の貴重な感動を回想し再体験しようとする。自分たちが通ったこの坂道の縁を形成する太古の岩。「大地の長い歴史の中で、過ぎ行くものと多く対面してきた」(“*the transitory in Earth’s long order*”)この岩に「我々がここを通過した」(“*... that we passed*”)という事実は記録されている筈だ。また第五スタンザで詩人は長い年月が経っても尚、「ここで馬車から降り立ったその人の幻影は残っている」(“*one phantom figure/Remains on the slope, as when that night/Saw us alight.*”)と確信する。最終の第六スタンザで、次第に消えてゆくその幻影に詩人は目を凝らしてこれを最後と別れを惜しむ。老いを意識している (“*my sand*

is sinking”) Hardy には、自分はもう二度と昔の恋の領地 (“old love’s domain”) を横切っていくことはないかと解っているだけに、最後の “Never again.” に詩人の悲痛な気持ちが読み取れる。

⑥ “The Spell of the Rose”

Hardy は1883年、Dorchester 近郊に土地を求め、永住の邸宅 Max Gate を建てた。当時すでに Hardy と Emma の夫婦仲は冷め切っていたのだが、それを意識して Emma は愛の花とされるバラの木を植えて夫の愛を取り戻したいと願った。しかし Hardy はバラを植えようとしなかった。後に Emma は自らバラの木を植えたが、それは彼女の死の1、2ヶ月前のことであり、バラが育つを見届けることはできなかった。Hardy はこれを後悔し、Emma の心情を察して彼女の亡霊の独白という形でこの詩を書いたのであろう。第一スタンザで「館を建て…愛を育むバラを植える」という夫の言葉が引用される。約束どおり大邸宅が完成したのだがバラの木は植えられなかった (第二スタンザ)。Emma は続く第三スタンザで、「彼がバラを植えなかったので多様な誤解が生じて恐ろしい事態と成り苦悩がやってきた」 (“Since he had planted never a rose;/And misconceits raised horrid shows,/And agonies came thereof.”) と言う。そこで事態を修復しようと、こっそりバラを植えた (第四スタンザ) が、十分にバラが育つ前に自分の命が尽きてしまった (第五スタンザ) と亡霊は語る。二人の不幸な結婚生活について、詩人は Emma に第三スタンザで「切断された魂」 (“souls in severance”)、「悲惨な歪んだ不和、長々と続く荒廃の日々」 (“divisions dire and wry,/And long-drawn days of blight”) 等と言わせている。殺伐とした暗い夫婦生活についての Hardy の正直な思いが滲み出ているが、Emma も同様の苦しみを味わっていたのである。Hardy もようやく妻の悲しみに思い至り、哀れと思うようになったと言うことか。亡霊は第五連で、「自分の死後、夫が昔のように私を愛しいと思うようになってくれたか知り

たい] (“... after I was called/To be a ghost, he as of old,/Gave me his heart anew!”) と言う。Emma の死後に書かれた一連の詩から見る限り、Hardy は反省し昔の愛情をとり戻したかに見える。最終の第六連で亡霊は、バラの花も咲いているだろうし、白内障が治ってハッキリ見えるようになった夫には私の姿も見えるだろう、と述べながらも最後の行で“Too late to tell me so!” と言い放つ。これは、死んでしまってからでは遅すぎて取り返しがつかぬという Hardy の忸怩たる思いの表れではないだろうか。

V 結び

“Poems of 1912-13”の中には入っていないが、Emma の死の直後に書かれた、彼女に関する短詩、「彼女は扉を開けてくれた」(“She Opened the Door”)を紹介したい。若く美しい Emma と風光明媚な Cornwall の地で愛し合った楽しい日々を振り返る中で、彼女が Hardy に4つの扉を開いてくれたことに思い至り、感謝する詩で、Emma との出会いとその後に続く求愛の幸せな数年間(1870年～74年)の要約とも言える作品である。先ず Emma は、西国(英国西南部にある Cornwall)に通じる扉を開けてくれた(第一スタンザ)。ここで Hardy は Emma と出会い恋に落ちた。次に彼女は Hardy が小説家になるよう背中を押してくれた(第二スタンザ)。

“She opened the door of Romance to me,/The door from a cell/I had known too well.”と詩文にある。ここでの“a cell”は当時 Hardy が関わっていた建築の仕事を指す。Emma との出会いにより Hardy は迷いを吹切ることができ、小説家になる決心をしたのだった。Emma が開けた3つ目の扉は「愛の扉」(“The door of a Love”)であった(第三スタンザ)。そして最終の第四スタンザで詩人は“*She opens the door of the Past to me,*”と述べる。ここだけ動詞の時制が現在になっているのは、老いと死を意識する孤独で不安な Hardy が今、43年前の愛の姿を日々回想し、それを生きるよすがとしている、ということを示している。長い年月、

Emma に心を閉ざしたままの Hardy だったが、Emma の死後、急速に彼女に心を開くようになって行く。静かに思い返せば、Emma との出会いがどれほど自分にとって大きな意味を持つものであったかが改めて認識されるのであった。彼に扉を開いて新しい世界へ導いてくれたのが彼女だったのだ。

結婚後わずか1年足らずで夫婦に不和の兆しが見え始め、少しずつ深まってゆくのを実感した時、Hardy はその危機を打開するための積極的な努力はせず、現状を黙認するかのよう忍従し、小説や詩の創作に打ち込むことに慰めを見出した。一方、敬虔なクリスチャンであった Emma は宗教の世界に救いを求め、キリストの愛に安らぎと慰めを見出していたようである。二人は決して幸せな結婚生活を送っていたのではないが、それぞれが自分の世界を持ち、各々の人生観と価値観に基づいて生きることができたので離婚するまでには至らなかったと思われる。

しかし1912年11月27日に Emma は死去した。看取る人もない孤独な突然死であった。夫婦間の溝を埋められぬまま妻に死なれてしまった Hardy の心痛は深く、動揺を抑え切れなかった。Emma と出会った43年前の幸せな日々を回想するにつけ、情熱的な純愛を消滅させ、不幸な結婚生活を招いた責任は自分にもあったと気づき Hardy は自責の念に苛まれる。その過程の中で詩人は、Emma と向き合い謝罪するために彼女にエレジーを捧げ、己の悲痛な胸の内を吐露せずにはおれなかったのであろう。

Hardy は、1914年7月に Mrs. A. Henniker に宛てて、

“Some of them I rather shrink from printing – those I wrote just after Emma died, when I looked back at her as she had originally been, & when I felt miserable lest I had not treated her considerately in her later life. However I shall publish them as the only amends I can make.” (Bailey, 25-26)

と書いている。“Poems of 1912-13” の出版に最初は乗り気でなかった

Hardy だったが、妻が亡くなった直後、昔の彼女を思い出すにつけてもその後の結婚生活において彼女に冷たくし続けたことを悔いる気持ちが強まり、詩を出版することでせめて自分の為したことの“amends”（償い）ができればと思ったのだった。

それ故“Poems of 1912-13”は作者の切実な悲しみに満ちており、“genuine elegy in English language” (Pinion, 128) と賞賛されるのであろう。しかし通常のエレジーと異なり、Hardy の詩には、死後に永遠の命を得るという確信が示されない。死後の生を信じない Hardy は、Cornwall の自然の中に出現する亡き妻の幻影に切ない呼びかけを繰り返しながらも、その超自然的現象に浸りきれず現実に立ち返る。死んだ Emma と老いて孤独な Hardy とは、正に幽明相隔てて交わることがない。死後に Emma と再び天国で合見えますように等という希望も一切語られない。

“Poems of 1912-13”において Emma に対する愛が甦ったように見えるが、Hardy が追い求めているのは、二人の仲がしっくり行っていた頃の若い Emma である。病んで老いた姿ではなく、若かりし頃の美しい姿で彼女を作品の中に再現したことは、夫としての亡妻に対する思いやりであったとも考えられるが、長年の不和の末に孤独死した老妻 Emma は、やはり Hardy の意識の外に追いやられてしまい、結局二人は心身ともに離れ離れのままのように思われる。幻想と現実の狭間にあって Hardy が、往年の若く美しい Emma を求めて呼びかける虚しい声は彼の悲しみと絶望をいやが上にも強調するのである。

注

- 1 Sub title の“veteris vestigia flammae”はラテン語で Virgil 作 Aeneid, IV, line 23からの引用句。英訳すると“Relics of old fire”で「昔の情熱の残火」
“Poems of 1923-13”全詩のテーマに相応しい句である。Bailey J. C. *The poetry of Thomas Hardy*, p.293参照
- 2 本論で取り上げた詩は、総て James Gibson 編集の Thomas Hardy: The

Complete Poems (London: Palgrave, 1976) より引用した。

- 3 Lyonesse は文学史上名高い Cornwall の一地域で、アーサー王ゆかりの伝説の地。瀧山季乃訳『境遇の風刺』124頁参照。
- 4 Cornwall イギリス西南部の海岸沿いの風光明媚な自然が広がる地域で Boscastle harbour, Beeny cliff, Pentargan bay, Tintagel など Hardy と Emma の courtship 時代、愛を育んだ場所である。Cornwall は “Poems of 1912-13” の詩全体の背景となっている。
- 5 Hardy は16歳で Dorchester の教会建築家、ジョン・ヒックス (John Hicks, 1815-1869) の徒弟となり22歳でロンドンに出て教会建築家、アーサー・ブルームフィールド (Arthur Blomfield, 1829-1899) の事務所の助手になった。英国建築協会の懸賞論文に当選するなど優秀な成績を収めて将来を嘱望されていた。例えば1863年3月16日『近代建築に彩色レンガやテルコックを採用することについて』の論文で英国建築協会の懸賞論文に当選した。Bailey の *The Poetry of Thomas Hardy*, p.12参照
- 6 Hardy は進化論を唱えた C. Darwin (1809-82)、哲学者、経済学者の J. S. Mill (1806-73)、宗教改革者の H. Spencer (1820-1903) などの書を読み、新しい思想に興味を持ち、キリスト教には懐疑的になっていた。Hardy の信仰については O. J. Bailey の *The Poetry of Thomas Hardy* の p.8と p.12を参照
- 7 “After a Journey” については、瀧山季乃訳トーマス・ハーディ第四詩集『境遇の風刺』170頁参照

引用文献

- Bailey, J. O.. *The Poetry of Thomas Hardy*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1972.
- Hardy, Emma. *Some Recollections*. London: Oxford University Press, 1961.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy, A Biography*. London: Oxford University Press, 1982.
- Paulin, Tom. *Thomas Hardy. The Poetry of Perception*. London: Macmillan Press Ltd, 1975.
- Pinion, F. B.. *A Guide to the works of Thomas Hardy and their background*. London: Macmillan Co., Ltd, 1968.
- Weber C. J.. *Hardy's Love Poems*. London: Macmillan, 1963.

参考文献

- Brown, Joanna Cullen. *A Journye into Thomas Hardy's Poetry*. London: W. H.

- Allen & Co. Plc, 1989.
- Butler, Lance St. John. *Thomas Hardy After Fifty Years*. London: The Macmillan Press Ltd, 1977.
- 藤井繁『晩鐘』東京：千城、1990.
- Gittings, Robert. *Young Thomas Hardy*. London: Heinemann Educational Books Ltd, 1975.
- Gittings, Robert. *The Older Hardy*. London: Heinemann Educational Books Ltd, 1978.
- Kay-Robinson, Denys. *The First Mrs. Thomas Hardy*. London: Macmillan London Ltd, 1979.
- Richardson, James. *Thomas Hardy The Poetry of Necessity*. London: The University of Chicago Press, 1977.
- Southworth, James Granville. *The Poetry of Thomas Hardy*. New York: Russel & Russel, 1966.
- Taylor, Dennis. *Hardy's Poetry 1860-1928*. London: The Macmillan Press Ltd, 1981.
- 瀧山季乃『詩人トマス・ハーディ』東京：篠崎書林、1972.
- 山本文之助訳『トマス・ハーディ論』東京：千城、1974.